

国語教育 210

☆ 東京都小学校国語教育研究会・機関誌 2017. 1

第四十六回全国小学校国語教育研究大会・東京大会を終えて

会長 鶴 巻 景 子

十月二十七日・二十八日に開催した第四十六回全国小学校国語教育研究大会 東京大会・第二十七回東京都小学校国語教育研究大会は、のべ一一人の方のご参加をいただき、実り多い大会となりました。本大会は「未来を拓く国語教育の創造―思考力・表現力及び探究力が育つ言語活動の充実―」を研究主題として、二年間にわたり各部が一生懸命取り組んできたものです。三十五の研究授業とともに研究協議会での提案では、新しい時代の国語教育について具体的な実践を示すことができました。参観者からも「どの授業も子供たちが意欲的に参加していて、素敵だと感じた。子供たちが自分の考えをもてるような課題設定、資料の提示の仕方、グループワークのたせ方、様々な工夫を見せていただき、ありがとうございました。」「子供たちが生き生きと活動し、学びを力にしている様子が分かりました。」「実際に授業を見学し、思考力、表現力、探究力を身に付けるための主体的な学習ができていて参考になりました。」など、研究の成果が伝わるすばらしい感想をいただきました。本会顧問・参与の先生方には、研究を価値付け、さらに、どのように各学校で活用すればよいのか方向付けていただきました。また、本会OBの皆様にも、温かいご支援をいただきました。本当にありがとうございました。

大会の成果として、二つあります。一つは、これまで本会で培ってきた単元学習は、アクティブ・ラーニングの考え方である今後の教育の方向性であること、もう一つは、新しい世代の授業力のある先生方が育っていることです。この成果を次の世代にしっかりとつなぎ、今後もよりよい研究を続けていきたいと思っています。

狂言方 山本東次郎様による狂言や特別講演は、日本の伝統文化が育んできた言葉を大切にする文化について、大変感動的なお話をいただきました。エグゼクティブアナウンサー・元NHKアナウンサー 木原秋好様・山根基世様からは、子供たちに言葉の力をつけることが人生をよりよく生きる力になることをお話しいただき、改めて言葉について振り返る学びとなりました。山根基世アナウンサーの話が研究授業での子供たちの姿と重なります。「真剣に出来事に向き合うとき、子供たちの言葉は、素晴らしい生き方につながる言葉として育ってくるのです。」これから子供たちの言葉と心を豊かに育てていきたいと思っています。

(杉並区立高井戸小学校)

第46回全国小学校国語教育研究大会（東京大会）
第27回東京都小学校国語教育研究大会報告

大会研究主題・副主題

未来を拓く

国語教育の創造

「思考力表現力及び探究力が育つ

言語活動の充実」

副会長 朴木 一史

一 主催

全国小学校国語教育研究会
 東京都小学校国語教育研究会

二 後援

文部科学省・全国都道府県教育
 長協議会・全国連合小学校長会・
 東京都教育委員会・杉並区教育委
 員会・東京都公立小学校長会・杉
 並区立小学校長会・杉並区教育委
 員会

三 日程

平成二十八年十月二十七日（木）

会場：杉並公会堂

参加人数：四〇六名

(一) 全小国研理事会・総会

(二) 開会式・全大会

(三) 基調講演

演題「新たな時代の教育課程と

国語教育」

文部科学省初等中等教育局
 教育課程課教科調査官

水戸部 修治 様

(四) 特別講演

狂言「柿山伏」「附子」

演題「言葉はことだま―古典が

教えてくれること―」

山本会狂言方

山本 東次郎 様

平成二十八年十月二十八日（金）

会場

杉並区立高井戸小学校

杉並区立杉並第一小学校

参加人数：二校計 七〇七人

大会二日間合計 一一一三人

(一) 授業公開

二校合わせて全三十四学級公開

(二) 研究協議会

話すこと・聞くこと部、書くこ

と部、読むこと部、言語文化部の

四部による研究発表及び協議会

(三) 実践発表会

全国から発表者を募り、二校合
 わせて十本の実践発表及び協議会

(四) 記念講演

杉並区立高井戸小学校会場

記念講演Ⅰ

演題「これからの国語教育―小中

一貫教育の視点から―」

十文字女子大学教授

富山 哲也 様

記念講演Ⅱ

演題「今、子どもたちに求められ

る言葉の力」

元NHKエグゼクティブアナウンサー

山根 基世 様

杉並区立杉並第一小学校会場

記念講演Ⅰ

演題「これからの国語教育―言語

活動の充実の視点から―」

文部科学省初等中等教育局
 教育課程課教科調査官

水戸部 修治 様

記念講演Ⅱ

演題「今、子どもたちに求められ

る言葉の力」

元NHKエグゼクティブアナウンサー

木村 秋好 様

四 大会基調提案概要

平成二十六年十一月に、文部科
 学大臣から中央教育審議会への諮
 問が行われ、平成二十八年八月二
 十六日に出された「次期学習指導

要領に向けてこれまでの審議のま
 とめ」について、昨年十一月まで
 にパブリックコメントと関係諸団
 体からのヒアリングを実施し、答
 申に向けての議論を経て、答申、
 そして新学習指導要領の告示が
 迫っている。

次期学習指導要領改訂の基本方
 針には将来の予測が難しい社会の
 中にも、伝統や文化に立脚した広
 い視野をもち、志高く未来を創り
 出していくために、必要な資質・
 能力を子供たちに着実に育むこと
 を実現するように示すことと示さ
 れている。

また、学習や生活の基盤づくり
 という視点から、小学校段階にお
 ける言語能力の育成は極めて重要
 であり、この育成の核となる国語
 科の果たす役割はこれまで以上に
 大切である。

これらを踏まえて、平成二十七
 年度から、研究主題を「未来を拓
 く国語教育の創造」と設定した。

「未来を拓く」とは、実生活に
 生きて働く言葉の「知識・技能」
 を確実に習得し、未知な状況にも
 課題意識を高くもって、これまで
 獲得した言葉の「思考力や表現力」
 を駆使して解決し、未来或る社会

において主体的・協働的な営みのもと、「探究力」をもって、自律的に生きて社会参画を果たしていくことであると考える。

これらのことから、研究副主題を「思考力・表現力及び探究力が育つ言語活動の充実」とした。

研究主題に迫るために、必要な力を本会は次のように整理した。

(一) 主体的に問題を見つけ、課題意識を高めて、課題を設定する力

(二) 課題追究・解決するために、駆使する思考・表現の力

(三) 思考力・判断力を駆使して協働的に課題を追究し解決する力

(四) 多面的な視点から解決の方法を判断し、探究的に課題解決する力

(五) 自らの生活を主体的に、豊かに営むための読書の力

(六) 言語文化や国語の特質を感受し、尊重する力

(七) (一)～(六)を生活や他の学習に機能させる力

これら七つの力を研究主題に迫

るための必要な力として、研究を推進してきた。

本会では、副主題にある「思考力・表現力」と「探究力」を次のようにとらえた。

単元の目標に向かっては、「思考力と表現力」を駆使して、主体的・協働的に課題を解決していく。

また、単元のそれぞれの学習過程において、単元を通して「思考力と表現力」を身に付けていく。

このことから、「思考力と表現力」は技能の側面で捉えて研究を進めてきた。

【探究力】については、課題解決の「学び方」の側面と捉えることとした。課題解決に向けてのそれぞれの学習過程における「学び方」を探究力と捉えて研究を進めてきた。

このように、「思考力・表現力」と「探究力」を分けて捉えて研究を進めてきた。

児童に「思考力・表現力及び探究力」を育むためには、副主題に掲げたように、学習過程に適切な言語活動を設定し充実させていくことが重要である。充実した言語活動の設定に当たっては、次のような条件があると考ええる。

(一) 設定する言語活動は、児童の主体的な、思考・表現が発動される学習過程となっているか。

(二) 設定する言語活動は、児童が何を学ぶのか、学んだのか、単元の目標達成に資するものになっているか。

(三) 設定する言語活動を行うことで、身に付けた力を活用し、機能させるものになっているか。

(四) 身に付けさせたい力に即した言語活動になっているか。

各研究部会では、領域特性に即して、次の観点を踏まえて具体的な研究内容を設定して研究を進めてきた。

(一) 研究主題、副主題に即し、育てたい言語能力と目指す児童の姿を明確にする。

(二) 児童の興味関心や言語生活を踏まえて、育てたい言語能力を焦点化し、言語活動の工夫が図られる単元を開発する。

(三) 主体的・協働的学びを展開し、基礎的・基本的な言語能力が確実に身に付き、活用される学習過程を工夫する。

(四) 単元を通して一人一人の児

童の言葉の力の育成に資する評価と指導の一体化を工夫する。

大会で公開した授業のすべては、開発単元である。

単元開発に当たっては、次のような手順を踏まえた。

(一) 多面的な視点から分析的に児童の実態を把握する。

(二) 身に付けさせたい言葉の力が学習指導要領のどの指導事項に位置づいているかを明確にし、児童の実態との関係から、単元の目標を設定する。

(三) 児童の実態を踏まえ単元の目標達成にふさわしい素材を選択し学習材化する。

(四) 学習過程を明確にし、単元を構造化し、指導事項に即した言語活動を設定する。

五 大会を終えて

十四年ぶりに行われた東京大会。本会が全小国研の大会を担う時は、常に新たな教育の方向性が示され、日本の未来を拓く国語教育を提案しリードしてきた。

本大会の成果と課題を精査し、新たな教育の方向性に対応すべく研究を深め、国語教育をリードしていく決意である。

話すこと・聞くこと部

自己充実を目指し、主体的・協働的に話し合う活動を通して
思考力・表現力及び探究力を育てる

部長 前田佐和子

一 研究主題について

本部会では「未来を拓く国語教育」とは、変化する社会を生き抜くために、話し合いの学習を通して、自ら課題を発見し解決しようとする姿勢や、異なる考えの相手と主体的協働的に課題解決したり、新しい考えを創造したりすることと
考え、研究主題を設定した。

① 「自己充実を目指す」とは

実生活に生きる話題での話し合い活動を通し、児童は考えの広がりや深まり、話合ったことが生かされ豊かになる経験を得る。話合つてよかったという満足感や充実感を得て、より高い学習意欲をもつことが自己充実であると考ええる。

② 「主体的・協働的に話し合う」とは

一人一人の児童が自分の考えをもち、自らの言葉で表現しようとする主体的な態度や、異なる考えを尊重しながら新しい考えを創造

しようとする協働的な態度を身につける中で、思考力・表現力及び探究力が育成されると考える。

二 研究の内容

① 話題設定の工夫

生活に根差した終末の活動を設定することで、目的意識・課題意識を明確にもって話し合いに臨めるようにする。

② 指導の工夫

◎育てたい力の明確化

低・中・高分科会ごとに重点を定め、「主体的・協働的な話し合いにおいて育てたい力」の表を作成し、育てたい力の系統性を明確に示した。

◎話し合いの提示

育てたい力に即し、応じ方、考え方、展開の仕方などを示す。

◎話し合いの可視化

意見を整理、関係付け、展開を捉えやすくするため「話し合いボード」を活用する。

③ 評価の工夫と活用

◎何を意識すればうまくいくのか
話し合いのポイントを考えさせる。
◎途中で振り返り、自己評価を生かして、使いたい言葉などを指導する。
◎終末に話し合い方を振り返る。

書くこと部

実の場で活用する、主体的・協働的な書く活動を通して、
思考力・表現力及び探究力を育てる

部長 早坂ひとみ

一 研究主題について

今日、自分の思いを言語化して簡単に発信できるツールが溢れている。今後、そうした手段を活用して、自分の考えを相手に的確に伝えていくためにも、まず「実の場で活用できる確かな書く力」を身に付ける必要がある。そこで書くこと部では、本会研究主題の「未来を拓く」につながる言語活動を「日々の生活で書くことに親しみ、書いたものを実の場で生かしていくこと」と考えた。書くことを苦手としている児童が「書いてよかった」「もっと書きたい」と、充実感や達成感を得る姿を目指した。

「実の場」とは、児童の書いた作品が実際に生かされる場のことである。自分の書いたものが生活の中で実際に活用される経験を通して、書くことに対する充実感や有用感を味わうことができる。

ある事柄について児童自身が「書いて伝えたい」という主体的な思いをもちながら取り組み、書く過程の中で必要感をもって他者と関わり合ったり学び合ったりしながら協働的に学習することで、児童の作品に深まりが出てくる。

実の場で活用する、主体的・協働的な書くことの学習活動を通して、児童の「思考力・表現力」と問題解決の学び方を探る「探究力」が高まると考えた。

二 研究の内容

思考力・表現力を育てるため例文と学習材を工夫した。この手だては、児童の主体性や協働的な活動を促すことにも繋がると考える。

探究力を育てるために、単元に入る前の書く意欲を醸成する期間として「0次」を大切にしている。これには長期的なものや短期的なものがあるが、0次を設定することで、児童は単元と出会ったときに、必要感をもって主体的に取り組むことができ、探究力の基となると考えた。

また、教師が児童に身に付けさせたい力を明確にして単元計画を立て、「実の場」での活用を位置付ける単元構成を工夫していく。

読むこと部

実生活に生きる言葉の力を育む

読むことの活動を通して、思考力・表現力及び探究力を育てる

部長 大久保旬子

一 研究主題について

「実生活に生きる言葉の力を育む」とは、読みを通して習得した言葉の力を生活の様々な場面で活用することによって、主体的に学んだり、よりよい人間関係を築いたり、読書生活を広げたりして、自らの生活を豊かにしていくことととらえた。

国語の学習において、児童が主体的に文章に向き合って読み、自分の思いや考えを広げたり、深めたり、新しい考えを生み出したりする力を付け、その身に付けた力を新たな国語の学習や他教科、生活の中で、目的や相手、意図、場所や状況に応じて使うとともに、その力を発展させたり、新たな力を作り出したりしていく力を育てることが大切である。

また、思考力・表現力及び探究力は、実生活に生きる言葉の力とも密接に関わるものである。そこ

で、三つの力を次のように定義し研究を進めた。

【思考力】文章を読み、課題を見つけ、論理的に考えたり体験と結び付けたりしながら課題解決に取り組み、自分の考えを形成する力

【表現力】文章を読んで考えたことを、目的や相手などに応じて、自分の言葉で明らかにする力や協働的な学びの基盤となるコミュニケーションに必要な力

【探究力】主体的に文章を読んだり、考えたことをもとに協働的に学んだりする中で、自分の考えを広げ・深めたり新しい考えを生み出したりしていく力

二 研究の内容

①発達段階に応じた具体的な児童の学びの姿を明らかにする。

②児童の興味関心、言語生活に根差した課題意識、目的意識が持続できる単元の開発をする。

③単元全体が課題解決の過程となるようにし、身に付けた言語能力や学んだことを活用させていく学習過程を工夫する。

④指導計画に沿った具体的な評価基準と児童の学びの姿を明確にし、適切な評価場面・評価方法によって評価し指導に生かす。

言語文化部

言語文化に親しみ、自ら表現し
学び合う活動を通して、思考力・表現力及び探究力を育てる

部長 篠原 敦子

一 研究主題について

言語文化部は、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の内容に関わる研究を担っている。

本会研究主題の「未来を拓く」を言語文化部は、「言語文化に出会い、言語文化や言葉と戯れ親しむことで、それらの良さに気付き、尊重していこうとする思いや、我が国の伝統文化を継承し、新たな創造へとつないでいく態度を育てる」ことであるとした。

「思考力・表現力及び探究力」を育てていくためには、児童が主体的にそして協働的に学習に取り組むことが欠かせない。そのため、「自ら表現し、学び合う活動」を通して、言語文化に親しむ児童の姿を明確にし、学習展開を工夫することで、思考力・表現力及び探究力を育てていく。

また、単元構成において、エン

ディングアクティビティ（単元のゴールとしての言語活動）に必然性をもたせることで、思考力・表現力を駆使して課題を探索していくことにつながると考える。エンディングアクティビティに向けて、児童は活動していく。その活動を進めていく児童の原動力が探究力である。すなわち、学習のエンディングアクティビティをしつかりと意識させることが、探究力を高めることになると考える。

二 研究の内容

児童の身の回りには、様々な言語文化が根付いている。児童の言語生活及び言語現象そのもの等も学びの対象であるという考えに立ち、これらの中から学習材を発掘していく。また、必然性のある言語活動が展開されるよう、国語単元学習として単元化していく。

言語文化の学習において、言語文化を楽しんだり親しんだりする中で、思考力・表現力及び探究力が高まるとの考えから、主体的・協働的な学習活動が生まれる学習過程を工夫する。

これらの内容が一覧で分かるように、単元構成図を作成し、学習活動や高めたい力を整理していく。

平成二十八年

第十回まなび塾活動報告

副会長 眞瀬 敦子

今年度のまなび塾は、夏休み最初の土曜日となる、平成二十八年七月二十三日、港区立高輪台小学校で、二百十七名もの熱心な受講生を迎えて、開催された。

講座は左記の通り。午前午後を一組とした十コース・二十講座、講師陣は本会が誇る、顧問参与の先生方である。

〈Aコース〉

午前：音読・朗読を取り入れた読むことの単元の工夫
むことの単元の工夫

午後：伝統的な言語文化を楽しみ
古典に親しむ指導の工夫

〈Bコース〉

午前：伝統的な言語文化を楽しみ
古典に親しむ指導の工夫

午後：聞くことを大切に話合
いの指導

〈Cコース〉

午前：話すこと・聞くことの題材
や単元作り

午後：論理的に考え表現する力を
育てる単元づくりや指導の
工夫

〈Dコース〉

午前：話合いや交流のさせ方と指
導の工夫

午後：言葉の力を磨く俳句や短歌・
詩の指導の進め方

〈Eコース〉

午前：読むことにおける板書や
ノート指導の工夫

午後：話すこと聞くことの題材や
単元作り

〈Fコース〉

午前：発達段階に応じた書くこと
の題材と指導の工夫

午後：文学的文章や説明的文章の
教材研究の進め方と指導の
工夫

〈Gコース〉

午前：対話や話しスピーチやプ
レゼンテーションの指導の
工夫

午後：進んで書くようになる単元
の開発

〈Hコース〉

午前：子供が主体的に読み深める
説明的文章の単元作り

午後：物語文や随筆などの書き方
と指導の工夫

〈Iコース〉

午前：意見文や論理的文章の書き
方と指導の工夫

午後：子供が主体的に読み深める
物語文の単元作り

午前：読書とつなげた読むことの
授業の工夫

午後：子供の発言の整理の仕方と
学ぶ力の定着を図る指導の
工夫

各講座とも、講義だけでなく、
都小国研四部会の実践報告やワー
クショップ、模擬授業など多彩且
つ実践的な内容で、冷房の効いた
高輪台小学校の各教室では、午前
十時から午後四時まで、熱心な学
びが繰り広げられた。

受講生は、半数が案内を見ての
自主的な申し込みであったが、管
理職や研究部長、先輩に勧められ
てという方も多く、校内研や区市
教育委員会の研修でご指導頂いた
講師の先生のお話がまた聞きた
くとか、毎年来ているとかいった
熱心なりピーターも多数いらした。

アンケートに書かれた受講者の
声には、「〇〇先生の、〇〇とい
う指導が大分かりやすかった。」
といった具体的なものの他に、
・授業ですぐに生かせる内容で、
とても勉強になった。

・夏休み明けの授業で早速実践し
てみたい。

・コースの中で午前午後、領域を
混ぜていただいたのが良かった。

・講師の先生方が、自分の経験を
惜しみなく出してご指導くだ
さった。

・聞きたい講座がいくつももあり
迷ったが、今年も沢山の学びを
もち帰ることができた。

・といった声が多く聞かれた。
中には、「他校の先生方との交
流が、刺激になった。」というも
のもあり、嬉しい限りであった。

・課題としては、
・午前と午後の講座を選ばせてほ
しい。

・初心者や国語が苦手な教員のた
めに、国語指導の基礎基本講座
があると良い。

・低学年向け、高学年向けとか、
何年目位の教員向けか、といっ
たもう少し細かな案内がほしい。

・二日間やってほしい。
・年二回やってほしい。
などが挙げられた。

いづれにせよ、毎年忙しい中で、
様々な工夫を凝らし、沢山の資料
を用意してくださっている講師の
先生方に厚く感謝する次第である。

平成二十八年年度 都小国研

多摩地区総会・研究大会報告

副会長 西久保律子

平成二十八年年度の多摩地区の総会・研究大会は、六月三日（金）、調布市立富士見台小学校を会場にして開催した。

一 多摩地区総会

都小国研の鶴巻景子会長をはじめ、諸先輩方も多数ご参加の中で、議事を円滑に進行できた。

平成二十七年年度の各部月例会や研究授業等の研究活動、普及啓発活動としての「多摩まなび塾」の開催等の報告

・平成二十八年年度役員の承認、新会長・役員の挨拶

・都小国研の研究主題「未来を拓く国語教育の創造―思考力・表現力及び探究力が育つ言語活動の充実―」に沿った多摩地区における研究活動の計画についての提案

・承認

平成二十八年年度は、各研究部で研究副主題にある、思考力、表現力、探究力が育つ言語活動の充実について、一単位時間、一単元に

おける具体的な方法を考え、授業において工夫が見えるよう研究を進め、多摩地区各支部に還元することを確認した。

二 研究大会

(一)前年度の東京都教育研究員による授業公開

総会に先立って、平成二十七年年度の東京都教育研究員であった調布市立富士見台小学校田中里香主任教諭が研究成果を公開する場として、研究授業「『わかったことを説明しよう』「花を見つめる手がかかり」を行った。

言葉を意識しながら文章を書き、学んだことを言葉にして振り返る言語活動や、課題解決の過程に主体的、協働的な学びのある授業の提案がなされた。

(二)支部の研究発表(調布支部)

総会と併せて、多摩地区支部の研究発表を行った。今年度は、調布市立小学校教育研究会国語部が発表した。

調布支部では、研究主題「自分の考えをもち、主体的に表現しようとする児童の育成」を目指し具体的な手法を開発しながら子供が言葉の力をつけていく取り組みを発表した。

(三)指導・講評

講師の都小国研の鶴巻景子会長からは、様々な視点から貴重なご指導、ご助言をいただいた。

・調布市国語部の発表にあった、毎時間二百字の取り組みや気持ちのメーター等の指導方法は子供たちの言葉の力をつける。

・本時の授業は、子供たちが振り返りを書いて教師が適切な温かい言葉を投げかけ、指導と評価が繰り返されていた。

・子供から出た言葉の価値付けを意識することは、次の学習の交流の視点につながる。

三 研究計画

〈話すこと・聞くこと部〉

定例会：毎月一回

研究授業：年一回

月 日：七月十二日(火)第四学年

会 場：立川市立けやき台小学校

授業者：山崎 未帆 教諭

講師：邑上 裕子 先生

(明星大学准教授・元都小国研会長)

〈読むこと部〉

定例会：毎月一回

研究授業：年二回

月 日：七月十四(木)第五学年

会 場：府中市立府中第二小学校

授業者：白倉 裕子 主任教諭

講師：井出 一雄 先生

(昭和女子大学講師・元都小国研会長)

月 日：二月十六日(木)第二学年

会 場：青梅市立若草小学校

授業者：大西 聡子 教諭

講師：井出 一雄 先生

(昭和女子大学講師・元都小国研会長)

〈書くこと部〉

定例会：毎月一回

研究授業：年一回

月 日：一月二十四日(火)第五学年

会 場：昭島市立拝島第二小学校

授業者：鈴木 博子 教諭

講師：安達 知子 先生

(元都小国研会長)

〈言語部〉

休部。研究活動再開の準備中。

〈講演会〉

「国語教育の今まで」としてこれから」

月 日：一月三十一日(火)

会 場：立川市立第六小学校

講師：邑上 裕子 先生

(明星大学准教授・元都小国研会長)

四 第八回多摩まなび塾

日時：十一月五日(土)

午前九時十五分～正午

会場：昭島市立中神小学校

内容：三領域と言語文化の指導に関する講座(四講座)

支部だより

品川支部

「主体的・協同的な学びを
実現する『文学的文章を
読むこと』の授業作り」

本区では、平成十八年度から小
中一貫教育を全区展開してきまし
た。その経緯から、教育会小学校
国語・図書館部は、平成二十年
度より中学校と一緒に活動をし、研
究を進めています。

今年度は、「読むこと」の領域で、
テーマを「主体的・協同的な学び
を実現する『文学的文章を読むこ
と』の授業作り」とし、特に物語
教材に焦点をあて、登場人物の心
情や場面の描写、文章の構成や展
開、表現の特徴を考え、友達との
交流活動を通してさらに深い学び
となるよう、研究授業を核に実践
を積み重ねています。

部員は小・中合わせて総勢百四
十名を超え、大きな研究組織に
なっています。そのため、一・二
年分科会、三・四年分科会、五・六
七分分科会、八・九年分科会に分
かれ、それぞれの分科会で研究授

業についての話し合いを深めてい
ます。研究授業は各分科会が一回
行い、小・中全員で協議会をもち
ます。

研究会当日は、教え子を中学校
で見つけたり、声を掛けられたり
することもあります。また、協議
会では、小学校・中学校の先生か
らの意見や感想の違いや共通点
が見つかるなど、小中一貫ならで
はの研究会となっています。

国立支部

「主体的に読む力を
育むための指導法の工夫」

本市の国語部は、「小・中学校
合同授業研究会」の中の一組織と
して小中学校の教員が合同で授業
研究に取り組んでいます。

本年度の研究テーマは、この合
同研究会共通テーマである「思考
力・表現力を高める指導法の工夫
―問題解決的な学習活動を通して
―」を受け冒頭のように決定し、
さらにサブテーマを「アクティブ・
ラーニングを通して」として研究
を進めています。

「本年度の研究報告」

低学年ブロックと高学年・中学
校ブロックがそれぞれ六月と十月
に講師を招へいし、研究授業を行
いました。六月は第六学年の「笑
うから楽しい」を、十月は第二学
年の「お手紙」を扱い、主体的に
読むための指導について提案、協
議を行いました。

十月の研究授業は、他部会所属
の教員や他市の教員、保護者・地
域にも公開し、協議会も参加して
もらいます。そのため、当事者と
して研究を進めていくことで却っ
て気付きにくくなっていくような
授業の課題について、単刀直入に
指摘を受けることのできる貴重な
機会となっています。

このち一月に、紀要原稿を作
成し、各教科の原稿等と併せて国
立市小中学校合同授業研究会の紀
要を作成することで一年の活動を
締めくくります。

小さい市ならではの小・中学校
合同での研究組織は、小・中連携
の鍵となり、児童・生徒の指導の
連続性を考えていく上で、大きな
役割を果たしています。

編集後記

今年度は、十月二十七日に杉
並公会堂、二十八日に杉並区立
高井戸小学校と杉並区立杉並第
一小学校を会場として全国小学
校国語研究大会東京大会・東京
都小学校国語教育研究大会が開
催されました。「未来を拓く国
語教育の創造―思考力・表現力
及び探求力が育つ言語活動の充
実―」の研究主題を具体的な実
践を通して、子供たちの活動す
る姿として明らかにすることが
できました。都小国研の先生方
の力が結実した質も量も充実し
た大会となりました。先生方の
熱意と創意が真摯に発揮された
実践の数々でした。ほんの数時
間の関わりの中でも、子供たち
の充実した学びを引き出す先生
方の授業に、これまでの研究の
積み重ねの厚みを感じました。
また、大勢の方々のご講演も
貴重なお話がたくさんありまし
た。例えば山本東次郎様の「受
け手を信じて過度な表現を慎
む」という意味のお話は日本人
が育んできたコミュニケーション
文化の意味や価値についても
振り返る機会となりました。
この大会の成功が、さらに発
展していくことを願っています。

昭島市立成隣小学校

加賀田 真理